

【記事等】 2024年1月16日掲載

## 作戦術創出における日本軍事の関わり スヴェーチン『戦略 (Strategy)』を読んで考えたこと

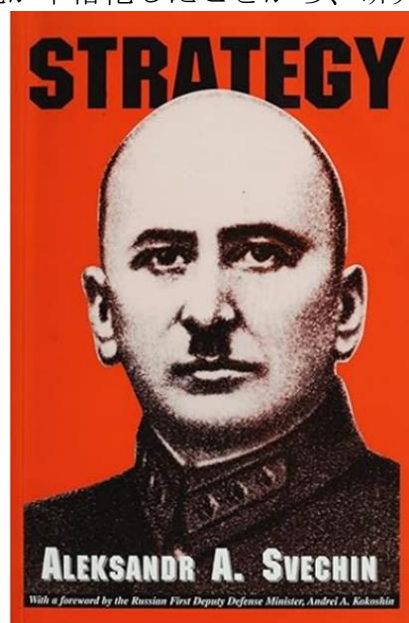
岩上 隆安

### はじめに

陸上自衛隊では近年、作戦術 (operational art) が脚光を浴びている一方で、その理解が広がっているとは言い難い。その一因に、当概念が難解で、かつ日頃の業務から縁遠いと感じられることがあるのだろう。本稿ではその理解の一助とするために、既存の作戦術に係る論考とは別のアプローチで作戦術を考えてみたい。

作戦術は、現在教育訓練研究本部所属の齋藤大介 1 佐 (博士) が平成 25 (2013) 年に戦略研究学会誌で当概念を紹介したことで、日本では学術的に認知されるようになった。これは、戦場において戦闘力を使用する方法である戦術が行き詰まったとの認識の下、軍事が戦術を超えて戦勝を獲得するために編み出された概念である。これはまた、軍隊の運用規模拡大に伴って戦場が空間的に拡大したうえに、鉄道、内燃機関、電信、機関銃といった科学技術の進展に伴って運用に時間的な先行性と内容的な新規性や融通性が求められたことで、従前の戦術を空間的、時間的、内容的に拡大したものとも見なせる。つまり、これは戦術とは概念としては別物であるが、実際は戦術と切り離して考えられない属性を有しているので認識することが容易ではない。しかも、当概念の創出は 1920 年代のソ連 (当時) であるが、西側軍事界では冷戦終結間際のソ連の情報公開政策 (グラスノスチ) 以降に研究が本格化したことから、研究の裾野が広いとは言い難く、その説明にはどうしても西欧の近現代軍事学や米軍教範から多く引用されているので、学習者には日本軍事から縁遠い印象を与えるきらいがある。

しかしながら、作戦術という語を初めて使用したとされるアレキサンデル・スヴェーチン (Aleksandr Andeervich Svechin) は、自身の日露戦争での経験を基に、第一次世界大戦の様相を踏まえてロシア軍の欠落機能としてそれを編み出した。つまり、作戦術は明治期の日本陸軍の行動に内在するものでもあった。よって、ここではまず日露戦争での日本陸軍の行動を主



としてスヴェーチンの著作で振り返ったうえで、第一次世界大戦の様相を概観する。次いで、それらを背景に彼の考案した作戦術を確認して、同概念理解のためのヒントを考察する。

これはもとより個人の見解であり、防衛省、陸上自衛隊、富士学校の見解ではない。

## 1 日露戦争での衝撃と第一次世界大戦の様相

作戦術創出の背景には第一次世界大戦の深刻な反省がある。他方で、スヴェーチンが日露戦争の従軍経験から作戦術の着想を得ていることは、あまり知られていない。作戦術創出の背景を認識するため、ここでは日露戦争から得た彼の着想と同大戦の様相とその後の影響とについて概観する。

米国のロシア軍研究者であったジェイコブ・キップ（Jacob Kipp）によると、スヴェーチンは1904年夏頃まで満州地方で歩兵中隊長として日露戦争に従軍し、その後はロシア満州軍総司令部で参謀将校として前陸軍大臣であったアレクセイ・クロパトキン（Aleksai N. Kuropatkin）司令官を補佐した。そこで彼は日本軍の戦争方法を驚きをもって受け止めた。彼の観察は概ね以下の通りであった。

当時のロシア陸軍は海上作戦の帰趨に関心がなかった一方で、日本軍は陸上作戦と海上作戦とを吻合させていた。また、ロシア陸軍は当座海城から遼陽あたりで部隊を集中させ、そこからハルビンとの間で増援を得て日本陸軍に攻勢をかけることを企図していた（長南、130-132頁）。しかしながら、ロシア陸軍が有利な態勢を確保すべく陣地構築しようとするたびに、日本陸軍が予防的な攻撃を仕掛けてきたので、ロシア陸軍はその都度後退を余儀なくされた。つまり、日本陸軍は機動によってロシア陸軍の企図達成を結果的に妨害した。さらに、奉天会戦では、ロシア陸軍は司令部の参謀を含めて主体性に欠けていた一方で、ドイツから任務戦術を学んでいた日本陸軍は移動状態のままからクロパトキン軍の翼側を攻撃して脅威を与えた。これによって、周到に計画されたクロパトキンの企図は完全に狂わされた。そうした中で、日本陸軍の下級将校は指揮官の企図を承知しており、かつ不測事態にも柔軟に対応できるよう訓練されていたため、与えられた任務を確実に達成していった（Svechin、25-31頁）。

この間、奉天会戦は戦場が正面155km、縦深は80kmにもなり、参加兵力も日本陸軍が火砲1000門、機関銃200挺を含む27万人、ロシア陸軍は火砲1475門、機関銃56挺を含む30万人と大規模なものだった（同、26頁）。この時、彼が日本軍に見たのは、特に広い戦場認識の下での陸上作戦と海上作戦との連携、高い練度を持つ第一線部隊と機動性ある砲兵との連携による機動

戦、そして小部隊の全般状況に適合した自主積極性だった（Svechin、54頁）。

1914年7月に勃発した第一次世界大戦では、パリの包囲を狙ったドイツ軍の攻勢が9月にパリ東方のマルヌで膠着した以後、双方が互いに陣地の弱点である翼側を攻撃しようと塹壕を伸ばす延翼行動が行われた。そして、双方が延々と陣地の争奪戦を繰り返した結果、戦争はヨーロッパ全体を戦場とする泥沼の長期戦になった。

そこで各国は戦局打開のため、兵士の大量動員に加え、戦車、航空機といった新兵器や化学兵器を投入した。その結果、世界の推定人口が約18億人のところ、1918年の終戦時には全体で7,000万人が動員され、莫大な物資と戦費が投じられたばかりか、戦死者900万人負傷者2,000万人のほか、700万人の市民の犠牲を出した。こうした惨状を繰り返すことのないように戦後は侵略戦争の違法化や集団安全保障体制構築の議論が進展した一方、万が一の際に国家には兵士の動員能力もさることながら、戦争当事国を中心に国家の兵器、機械生産力、さらにはそれを支える経済力が戦勝には重要と認識されるようになった（総力戦）。軍事の分野でも各国は、兵器の高性能化を推進したほか、機関銃の発射速度の増大や火砲の射距離と弾丸威力の増大と連携して、内燃機関を活用する運動戦を志向するようになった。

## 2 スヴェーチンの「作戦術」

日露戦争で衝撃を受けたスヴェーチンは、第一次世界大戦を観察して1923年から24年の間に軍事術を再定義する中で、従前戦術と戦略という2つの概念で考察されてきた戦争に作戦術（ロシア語では *operativnoe iskusstvo*）を加えた。それを彼はいかに捉えていたのか。ここでは、彼の考えていた作戦術を抄訳により確認する。

彼はまず作戦について、

もしある戦域において、ある中間目標達成に向かって何らの障害がなく軍隊が行動しているのであれば、我々はそれを作戦と呼ぶ。作戦は異なる行動の複合体であり、その行動は具体的には作戦計画の策定、兵站の準備、出発点への部隊集中、防御陣地の構築、行進、直接的な包囲もしくは予備的な突破によって相手の一部を包囲、撃破するための会戦、または、相手の一部を後退させるためやある地域や地線を確保または保持するための会戦をいう（同、69頁）。

と述べた。また、作戦術については、

作戦術は使用できる資源、他の戦術任務に使用できる時間、前線に配備可能な兵力、そして作戦自体の本質を勘案して、作戦遂行の概要を指示する（同、69頁）。

とした。さらに、軍事の本質的役割である戦闘行動について、

戦闘行動は自己完結的なものではなく、作戦を構成する基本的資源に過ぎない。単一の会戦によって、戦闘行動の究極目的が達成されるのはごく稀である。一般的には究極目的に至る過程は、その期間の長短を問わない休止によって区分される一連の作戦に分割される。そしてそれら作戦は、実行される戦域が異なるばかりか、関係部隊が達成すべき中間目標が異なることから態様もそれぞれ異なる（同、68-69頁）。

と述べた。

### 3 作戦術理解のヒント

#### （1）スヴェーチンの考える作戦術とは。

日露戦争で彼が感じた日本陸軍の優越性を裏返すと、ロシア陸軍は当時、陸軍単独によって、事前に想定した戦場で行う1回の決戦で日本陸軍を撃破して戦勝を獲得しようと企図していたことが推察できる。しかも、その戦い方は前陸軍大臣が企図したものであったから、当時のロシアでは一定の権威のあるものであったと見なせる。

ここで、ロシア陸軍の当時の戦い方を戦術と仮定して、彼は次の戦争に勝つために現状を打破しようと作戦術を創出したとしよう。すると、彼が創出した概念の輪郭が浮かび上がってくる。それは、まず戦争遂行手段を陸軍だけに限定しないこと、次いで単一戦場での決戦に固執しないこと、さらに単なる撃破で戦争が終わると考えないことである。つまり、彼の言う作戦術は、軍隊が陸軍以外の軍事組織を含んで、戦場に留まらない広い空間や決戦時に留まらない時間を活用して、相手に単一または複数の戦場で撃破だけでない効果を与えて戦勝を獲得することと言えるだろう。重ねて、陸軍が単一戦場で敵の撃破を企図することは戦術の領分と考えられ、戦術と作戦術以外は戦略と考えておけば大筋は外さないだろう。但し、作戦術は戦術だけでなく、戦略からも独立して考えられず、少なくともその目標は戦略から示されないと適正に機能しない。

#### （2）彼はなぜ戦術の見直しではなく、作戦術の創出を発想したのか。

日露戦争の反省を受けて、なぜ彼は戦術の見直しではなく、作戦術の創出を

発想したのか。恐らくそこには敗北の悔しさ、虚しさなどはあるのだろう。しかし、それだけでは見直しで事足りる可能性があるので不十分である。では、それは何か。それは既成概念では戦勝は獲得できないとの実感ではないだろうか。先述の戦場の拡大や鉄道、内燃機関、電信、機関銃といった科学技術の進展に伴う戦争様相の変化から受けた彼の衝撃はそれほど凄まじかったのだろう。ましてや、ヨーロッパ全体を広く戦場として4年間にわたり複数の会戦が生じたうえ、多大な死傷者を出した第一次世界大戦を思えば、彼が戦闘力を陸軍単独での単一戦場での1回の決戦でしかも、相手の撃破として使用する思考枠組みだけでは、時代に適合できないと考えたのもうなずけるだろう。

### (3) 作戦術創出の意義とは。

彼が戦術の見直しではなく、作戦術の創出を発想した意義は何だろうか。戦術は単一戦場において戦闘力を使用する方法であるので、そこでは「如何にして戦うのか (how to fight)」が考察の主体となり、これを実行すれば勝てるといった原理原則の議論やこのようにしたら勝てるといった手続き論に関心が集まる傾向になる。その意味で、戦術だけでは不十分であるという自覚は、論理上は「如何にして戦うのか」や原理原則の議論、手続き論だけでは戦勝には不十分ということと同義になる。つまり、作戦術の創出とは、戦争全体に占める戦術の意義の低下、具体的には原理原則重視の思考や手続き論の相対的重要度の低下を意味するものとも言える。但し、もとより戦って勝つという軍事の本分は現代でも変わらないので、これで戦術が不必要となる訳ではない。

戦争様相の変化に伴う作戦術の創出は、また戦術の時間的、空間的、内容的な拡大の意味で戦術にはなかった視点の導入でもある。それは戦って勝つだけでは不十分なので、戦って勝つ以前では、次なる戦争とはそもそも如何なるものなのか (What/how is the next war?)、そしてその戦争での勝ちとは一体如何なるものなのか (What/how is win?) を考察しておかないと万万が一の際に適正な武力行使ができないという視点。また、例えば奉天会戦後の日本陸軍の樺太増派のように、戦って勝った以降も戦略が望む状態に近づくための処置が軍隊としても必要になるという視点である。つまり、近年米軍が目的合理的に軍事を運用することを重視して、作戦環境 (Operational Environment) を認識し、戦略的な指示などを確認したうえでエンド・ステート (End State : 目標状態) を設定し、それに向けた作戦手法 (operational approach) を案出する淵源は実はこの辺りにあるとも言えるのである。

### おわりに

今陸上自衛隊で脚光を浴びている作戦術の祖型が、日本軍事にもあったと

いう事実には意表を突かれる。しかも、先に理解の不拡大要因として挙げた縁遠さは、我々の日本陸軍の革新性への無自覚を意味する可能性にもなる。よって、これらは我々が日本の近代戦争史に如何に向き合うのかを問い直すきっかけにもなるだろう。

日露戦争と言えば、「二百三高地」や「日本海大海戦」といった映画を思い浮かべる向きも多いだろう。それら激闘は、陸上、海上の一大作戦であったばかりでなく、実は現代の統合運用の先駆でもあり、作戦術創出に先立ち当時の満州や朝鮮半島からのロシア軍の駆逐という目標状態に向けて吻合されていた事例とも言える。しかもその中で、先人達は現代の機動戦やミッション・コマンドにつながる行動もとっていた。いずれにせよ、作戦術はそれを何と呼ぶかはともかく 120 年ほど前、日本軍によって既に実践されていた。少なくともスヴェーチンはそのように見た。西欧軍事学や米軍教範を見て、作戦術の理解で足踏みしている諸氏は、これを機に日露戦争史を紐解き、先人と対話しては如何か。同戦争史と向き合うことで、皆様がそれを身近に感じ、それが作戦術の実際的な理解につながれば幸いである。

なお、本稿はあくまで作戦術を身近に感じてもらうことを意図したもので、説明を単純化していることに留意が必要である。正確な理解を得たい方には齋藤論文、さらには作戦術に係る文献を読むことを薦める。

#### 【参考文献】

齋藤大介「戦争を見る第三の視点 『作戦術』と『戦争の作戦次元』『戦略研究 12』 2013 年。

長南政義『新史料による日露戦争陸戦史 覆された通説』並木書房、2015 年。

デイヴィット・M・グランツ『ソ連軍＜作戦術＞ 縦深会戦の追求』梅田宗法訳、作品社、2020 年。

Aleksander A. Svechin, *Strategy* (Minneapolis, US: East View Information Services, 1992).

B. J. C. McKercher, Michael A. Hennessy, *The Operational Art: Developments in the Theories of War* (CT, US: Praeger, 1996).

Michael D. Krause, R. Cody Phillips, *Historical Perspectives of the Operational Art* (US: Center of Military History Publication, 2006).

※ 本稿は、『修親』令和 6 年 1 月号に掲載されたものに一部加筆、修正したものです。